シティライフ編集部
「NEXT」お届け&現地リポート

Let's gather! プロジェクト

宮城県石巻
スタッフ 幸

被災地・東北へ

7月9～11日の間に伺った宮城県石巻～岩手県大船渡。海岸沿いの景色はひたすら瓦礫や壊れたままに建物で、5年10年で、元の暮らしに戻ることは、とても難しいのではと感じました。そこで、様々な方々にお会いしてきました。

「地域に根付いた支援」をモットーに 心のケアと自立支援を行う NPO法人 JEN石巻事務局

JEN石巻事務局は、建設会社の詰所を提供してもらい運営されていました。出迎えてくれた本田さんは広報担当で自身も被災され、3日間避難所生活のあと、やっとの思いで自宅へ。消息のわからなかった本田さんの帰宅に家族みんなで喜びあったそうです。

JENでは、雇用と地域単位でのケアを目指していることから、被災地で事務局スタッフを募集し採用します。本田さんもその一人。「みんな被災状況が違うので、心のケアはとても重要なんです。家がなくなった、大切な人がなくなった、仕事がなくなった。本当にそれぞれの苦しみは違います。」

地域の方々と寄り添う活動ができるよう住宅街にコミュニティースペースを提供してもらい、炊き出しや支援物資を提供。ボランティアの方々の事務局としての活動も行なっていて、世界規模での支援活動をしているJENに、恩返しの気持ちで参加されている海外の方やリピーターの方も多く、みなさん笑顔で元気に作業をされていました。

「被災者の方々へは心のケアを第一に自立を促すため、自治会の会長さんに相談しながら、活動の計画を立て、一緒に地域のコミュニティー形成を目指しています。あたらしい街をつくっていこうとみんなでがんばっています。」と本田さん。

きれいになった広場でのサッカー教室

コミュニティ広場での清掃活動のイベント

津波の圧力で支柱が曲がった公園のブランコ。津波のパワーが伺える

現在、JEN石巻事務局では、仮設住宅に生活用品を支給していく活動を行っています。地域の方々のニーズを聞き、必要な物資を用意し、その支給に現地で配達員を募集。自立に向けた支援は続いています。

特定非営利活動法人ジェン (JEN)
http://www.jen-npo.org/

500人の命をつなぐための 避難所の「食」を安全に守る笑顔

翌日、本田さんのご紹介で南三陸町の志津川高校避難所へ。避難所のリーダー的存在でみんなの食事をつくっている「卓ちゃん」こと内田卓磨さんにお会いしました。高台の高校の麓にあった内田さんの自宅は表札の柱だけが残り、その先の海に向かう市街地で経営していたBARは跡形もなくなったそう。偏った食糧支援を調整し、500人が新鮮な食材、できちんと食事ができるよう、「ふんばろう東日本支援プロジェクト」を利用し、自分たちで情報を発信し、避難所に送られる物資はすべて内田さん宛。会議を重ねチームワーク抜群の雰囲気に。8月末には解散になった避難所ですが、内田さんたちが築いたこの結束は、その後も、活かされています。

上:炊き出しに集まったボランティアの方々
下:NEXTを持って。卓ちゃん(右)

ふんばろう東日本支援プロジェクト
個人から個人への支援が可能なサイト
http://fumbaro.org/

1本だけ無事だったポプラの木。越喜来港復興の希望の木に

最終日、岩手県まで足を伸ばし、大船渡市の越喜来港へ。東北の三陸は、水産業が盛んな地域で、北摂地域の駅前のような市街地・中心部のほとんどが沿岸部に広がっていて、街ごとなくなっているという印象の景色が続きました。そんな港町で被災したお母さんたちにお会いしてきました。

力仕事ができない港のお母さんたちに、暮らしを支え、生きる原動力になる「仕事」をつくろうという「三陸に仕事を!プロジェクト」。そのプロジェクトに参加し、手作りミサンガを作っている佐伯さん、中田さん、片山さん。

「仕事がある。笑顔になれる。」漁網で編んだ手仕事のミサンガと支援の「環」

「この話を聞いた時、すぐに、やろうと思いました。お金が必要だし、先への不安が募るばかり。少しでも生活を支えられたら」と家族で営んでいたホタテ漁場を失った佐伯さん。現在、ミサンガを作っている女性たちのグループは三陸で200名を超えるそう。支援になるミサンガを身につけてみませんか?

三日間、お会いしたみなさんのお話しを聞いて、関西からできることを考えていきたいと思います。

2本セットで、1,100円
つくり手だけでなく、生産管理も被災団体や被災企業が行なっている。

お話しを聞かせてくれた佐伯さん、中田さん、片山さん(左から)

浜のミサンガ「環」
http://www.sanriku-shigoto-project.com/